

復祖父讐

〔常山紀談〕二直家田○浮は和泉能家の孫なり、能家はもと浦上掃部助村宗に仕へ、備前邑久郡砥石の城に居れり、浦上の長臣島村豊後守後入道して貫阿彌といひしは、鷹取山の城に有て、威勢ありて能家を殺害せり、これ享祿四年の事なり略○中天文十五年、直家十五歳に成ぬ、母の方にゆけば略○中直家よく聞せ給へ、祖父泉州をば島村が殺したりき、父仇を得討給はで口惜くこそ候へ、いかにもして一度祖父の弔を遂んと存るに、島村を殺すに過たる事や候、われもしかしこきと島村聞なば其儘にたすけ置べきや、只是のみ心を苦め謀をめぐらし、父祖の恥を雪ばやと存るなり、はや十五に成候ぬ、殿宗景を浦上に奉公仕らんやうをはからせ給へ、かりそめにも此一大事口に出させ給ふなといひたりしかば、母驚き且悦て、密に宗景に告て直家初て仕へけり略○中直家たばかり得たりと悦て、宗景に告て、沼より天神山の間に狼烟をあぐべし、しからは備中山○中を討得たりとしられよ、のろしあげなば、島村がもとへ使をはせ、中山謀叛したる故、直家に下知してうたせぬ、とく沼にかけ向て直家に力を合せよと下知あらば、島村年老たれども、遠く慮るにいとまなくて、一騎がけに、沼の城に來るべきを討ん事易かるべしと日を約しぬ略○中かくて狼烟をあげしかば、宗景即島村がもとに使を馳て告やりしかば、島村聞て、つゞけ者共とて馬に鞍置せ打乗、從兵七八人計にて沼の城に來る、城はとく乘とりたれば、直家本丸にありて門を閉たり、島村かゝる謀有ともしらす、本丸に入處を、かねて計り合たれば、取圍て討取たり、

復父母讐

〔今昔物語 二十五〕平維茂郎等被殺語第四

今昔、上總守平兼忠ト云者有ケリ略○中餘五將軍維茂ト云者ハ、此ノ兼忠ガ子ニテ有ケルガ、陸奥國ニ居タリケレバ、父ノ兼忠ガ上總ニ有ルニ、久ク不見奉ニ此ク上總守ニ成テ下リ給、タレバ、喜ビ乍ラ參ト云ヒ遣セタリケレバ、兼忠モ喜テ、其ノ儲ヲ營テ何シカト待ツニ、館ノ人既ニ此ニ御坐シタリト云ヒ騒ゲバ、其ノ時ニ風發テ外ニハ不出シテ、簾ノ内ニ寄り臥シテ入レ、立テ仕フ小